

『東方』二九七号より

版本学の粋、 そして古籍流動史へ

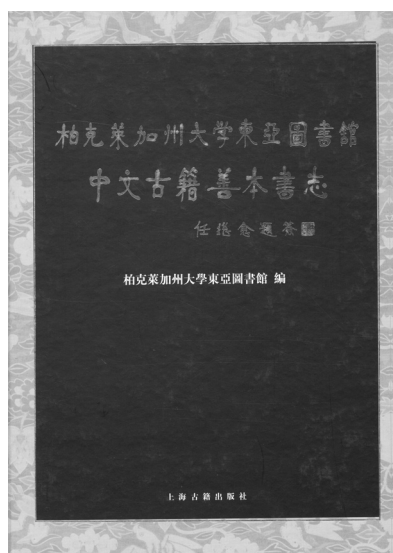
高橋 智（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）

最近、中国で夥しく出版される古籍目録類や書誌学（版本学）関係の研究論著は、本来ならば、逐次その価値を定め、紹介していかねばならないものである。玉石混交とはいえ、うっかり買い逃してしまうと後々の研究に支障を来すものが少なくないからである。本書は、米国カリフォルニア州立大学バークレイ校所蔵の漢籍善本の解題目録である。所載の善本は清乾隆年間・一七九五年以前の印本写本を主としている。ハーバード大学ハーバード燕京図書館の中文善本解題目録（沈津編・一九九九・上海辞書出版社）と姉妹編を為す。遡れば、王重民（一九〇三～一九七五）の『中国善本書提要』（一九八三・上海古籍出版社）、屈万里（一九〇七～一九七九）の『プリンストン大学中文善本書目』（一九七五・芸文印書館）とも類を為すものと言えよう。いずれも、中国目録学で、姚名達らの称する第一類の目録で、編目・解題を備えた漢の劉向『七略』以来の伝統を守る超級の学術成果である。歴史を振り返れば、宋の晁公武『郡齋讀書志』、清の『四庫提要』『天祿琳琅書目』に相当し、『弁章學術・考鏡源流』（清の章学誠『校讎通義』の語で、分類・編目を見れば書物の學術・歴史的意義が明瞭に理解されること）を体現したものとも言える。解題の性格はテキスト研究、即ち版本鑑定に精審で、張元濟『涵芬樓燼余書録』（『張元濟古籍書目序跋彙編』張人鳳編・二〇〇三・商

トップページにもどる

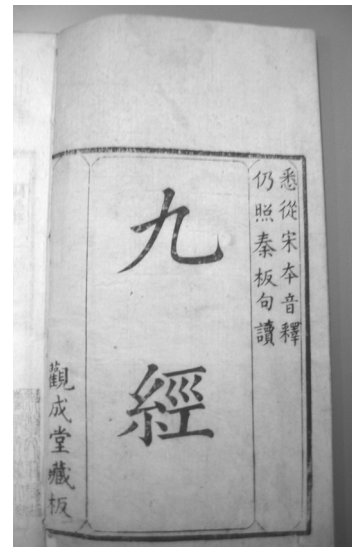
陳先行編

『伯克萊加州大学東亞圖書館中文古籍善本書志』
二〇〇五年・上海古籍出版社・八、二九五円



務印書館に収載）、潘祖蔭『滂喜齋藏書記』（清光緒間潘氏刊本、一九八五・揚州古籍出版社影印）、王文進『文祿堂訪書記』（一九四二・王氏排印）、傅增湘『藏園群書題記』（一九八九・上海古籍出版社）等に連なるものである。

編者の陳先行氏は上海圖書館の研究員、沈津氏とともに顧廷龍門下の双璧である。版本研究は実際の原本の比較調査が最も重要で、愚直な徒勞が思いも懸けぬ発見を呼ぶ。そして、この目的と方法を身に付けた人が著す解題目録は、安心して使える。後世を誤らすこともない。しかし、その作業を学問研究の域まで高めるのは容易なことではない。バークレイの善本には宋・元版とて少なく、明・清の版本が圧倒的に多い。解題を書くほどではないと言う意見が一般的ながら、本書は、実は、明・清の版本の解明が、書物文化研究にとって大きな意味を持つことを実証した労作なのである。陳氏は数カ月現地に滞在し、調査資料を上

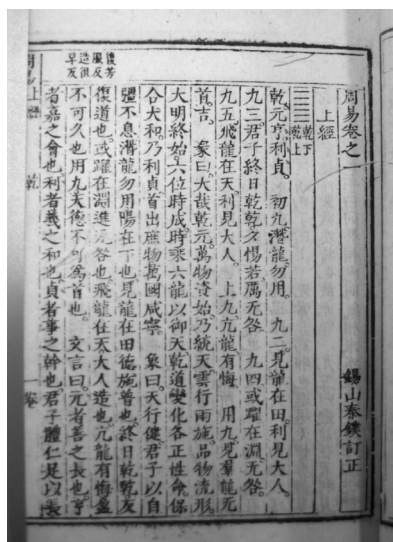


『九經』観成堂本の封面

海に持ち帰り、版本研究の宝庫である上海図書館の資料を駆使して、比較調査に数年の歳月を費やした。この点では姉妹編を更に上回る内容となった。こうした作業は、きかない表現だが、反吐を吐くほどの緊張と疲労を伴う。実際、陳氏はこの間、胃から出血したという。まさに、心血を注いで版本学に貢献したわけである。恐らくは、本書が、現代の版本学の最高水準を示す解題目録で、今後、私どもが後続の成果を為していく場合の指標となることは間違いない。

目録の著録は、著者・刊年等、一行の記述にその書の意義を反映させる大変困難な学問である。例えば、本書の劈頭にある『九經』について、「明秦鏤訂正 明崇禎一三年秦氏求古齋刻本」と著録するが、ここに深い意味がある。即ち、康熙の『無錫県志』に「訂正九經」と記してあること、秦氏の本版自序に「不揣、爰取九經重加訂正、略其疏義、存厥本文、字句之間、頗攻讎較、越六載、始克竣事」ともあって、本書の成立に苦心した秦氏の貢献は特に顕彰するべきとして、「明秦鏤訂正」を加えたのである。そこで、『中国古籍善本書目』（一九八五～一九九六・上海古籍出版社）にこの記述が無いことを不満としている。更に、版本に関して、本版を忠実に覆刻した清の観成堂刻本が存在す

トップページにもどる



『九經』観成堂本（覆刻）



『九經』求古齋本

ることを注意する。観成堂本はしばしばその封面(図参照)を除去して求古齋本を名乗るので、鑑定には十分な調査が必要であることを強調する。このように、初印・後印や増刻・修訂など、またそれによって生じる内容上の差異についての、明・清の版本に多く見られる諸問題について、誠実に分かる範囲で考証を加えている点は学術レベルの高さを示す証である。

ところで、編者の陳氏にとって本書で特筆したかったのは、本館にも清の翁方綱(一七三三～一八一八)の手稿本が所蔵されていたことで、「易附記」「詩附記」などの未定稿

を今次、発見したことである。陳氏はかつて、澳門（マカオ）中央図書館で翁氏の稿本一批を発見、その『四庫提要稿』を杭州富陽古籍印刷廠から二〇〇〇年に影印した経緯があり、再び米国の地で翁稿に出会った縁を強調しないわけにはいかない。そして、その翁稿の原所蔵者といえば、マカオもバークレイも、共に、清末民国の著名な蔵書家、嘉業堂劉承幹（二八八二～一九六三）なのであった。嘉業堂の旧蔵から今日のマカオ現蔵に至る歴史は影印『四庫提要稿』の陳氏の解説に詳しい。こうしたわけで、バークレイの古籍善本の主要な部分は殆どが嘉業堂の旧物と言っても過言ではない。それは、旧蔵印をきちんと著録してあることによって分かる事実である。

ところが、今回、私が特に関心を持ったのは、この嘉業堂の旧蔵と並んで、本館の主要なものを占めるのが、日本の近代漢詩人、今関天彭の旧蔵書である、ということであった。私は近年、安井息軒や根本通明など近代漢学者の旧蔵書を調査し、また中国の音韻学者・趙蔭棠などの特殊な蔵書と学者の関わりを研究し、旧蔵書の復元による古典籍の流動史という分野を確立する必要性を感じている。この研究は、例えば、最近大陸でも、先年、国家図書館が購入した民国時代の大蔵書家・陳澄中（名は清華、一八九四～一九七八、銀行家・北の周叔弢と並び南陳北周と称された。詳細は『祁陽陳澄中蔵書』二〇〇四・中国嘉德伯買公司参照）の蔵書について、上海図書館等に分蔵されるものと併せた全体像の復元研究が始まるなど、様々なテーマについて、今後発展する分野となろう。欧州や日本近代の流動についても、京大人文研の高田教授がすでに相当の研究蓄積を持っているが、米国に於けるこの分野の研究もこうした目録の発刊によって、盛んになることが予想される。

▶ トップページにもどる

ハーバード燕京図書館の沈氏の著録にもすでに豊富な日本の蔵書印が現れている。該館の漢籍は、東大東文研の大木教授によると、山本書店の請求書が遺っているなど、相当日本から流入している痕跡が窺えるという。このひろがりを含めても、世界に点在する漢籍移動の歴史の研究なくしては、中華文明の研究も、ひと味足りないものになってしまうと考えるのは私だけであろうか。

今関天彭については、『東方学』第三三号（一九六七・東方学会）の「学問の思い出」に「今関天彭先生を囲んで」という記事があるが、『東洋文化』復刊第二七号（一九七二・無窮会）の「先師片影」に國廣壽氏の略伝・著述一覧があり、詳細を極めている。名は壽磨。一八八二年千葉県生まれ、一九七一年没。享年八八歳。石川鴻斎門下。『国民新聞』、『国民雑誌』の記者を経て、一九一八年から北京在住、中国の学者文人と交流し、政治家の顧問ともなり、日本を代表する中国通の一人であった。戦後は小倉正恒の出資による雑誌『雅友』を主宰した。若くして、『東京市内先儒墓田録』（一九一三・政教社）を著し、森・外の絶賛を受けた。『宋元明清儒学年表』（一九一九・自刊）は最近中国でも影印された。その他、中国の学術を記した小文は数え切れず、内容は今も色あせない。漢詩研究は日本中世の五山文学から江戸・明治に及び、自らも『天彭詩集』（一九六二・雅友社）などを著している。國廣氏によれば、北京で一〇万巻もの書物を購入したという。その後、蔵書は三井文庫に寄託（北京では三井の庇護を受けた）され、バークレイに移ったのであった。また一部は名古屋の鶴舞図書館に「深山文庫」として遺る。『加州大学バークレイ校所蔵江戸版本書目』（岡雅彦等編・一九九〇・ゆまに書房）に今関氏の蔵印の写真があったが、これで全てが繋がった。今関天彭

は江戸時代以来の漢学が明治以降衰退の一途を辿るのをくい止め、かつ新しい中国を理解し、真に漢字文化を実践した近代漢学の最も重要な人物の一人である。購書・読書がその人生の大半であったならば、その蔵書の全貌を見ることによって、学問の根底にあるものを垣間見ることができるといえるのである。本目録の著録に於いては、経部八部、史部二五部、子部三四部、集部四一部、叢部三部、総計一一一部が天彭の旧蔵で、全体八〇二部からすれば、主要な部分を占めていると言えよう。内容は、戯曲小説から清朝の稀少詩文、子部の雑類、史部の地誌類など多方面に亘り、その人自身が百科事典とも言える幅広い学問であったことが理解される。本目録の読者は、蔵書印の記述をみれば、容易に天彭の旧蔵書を探しうる。こうした目録の読み方ができるのも、目録学の効用の一つである。

因みに、蔵印によって知られる今関天彭以外の主な日本の蔵書家は、伊佐早謙(米沢藩の書物掛)、島田翰(書誌学者)、犬養朴堂(政治家犬養毅)、富岡鐵斎(画家)、内藤湖南(東洋史学者)、土井顎軒(医者)、読杜草堂(収蔵家寺田望南)、小津桂窓(伊勢松坂の富商・西荘文庫主)、長尾雨山(書家・漢学者)、小汀利得(おばましえ・経済評論家)、長澤規矩也(書誌学者)、薄井恭一(「江都薄氏……」印、文藝春秋編集)、また、釈大通(近世初の学僧)、宝玲文庫(英人フランク・ホーレー)、更に、伊達家、佐伯文庫(毛利家)、阿波国文庫(蜂須賀家)や狩谷・斎、松本月痴(勝鹿文庫主)、仏典では三聖寺(東福寺塔頭)、南都善光院などである。日本の書物流動の研究には欠かすことのできない資料と言える。今後、本館所蔵善本以外の情報も公にされることを願って止まない。

トップページにもどる